

高岡市万葉歴史館紀要 第三十三号 令和五年(二〇二三)三月

令和五年(二〇二三)三月三十一日 発行

2022

高岡万葉セミナー

内舎人としての若い家持	廣岡義隆	1
遠江・駿河・伊豆三国と万葉歌 — 「ゆたけし」をめぐって —	平館英子	15

『万葉集』の部立名としての「相聞」	鄧慶真	36
「玉梓の道」の起点と終点 — 越中における大伴家持の作歌意識 —	井ノ口史	50
上代の「趨」字に関する覚書 — 「趨」との通用関係に関わって —	垣見修司	67
春日野作歌考	鈴木崇大	79
あらたに収蔵した断簡「二葉について — 「梅尾類切」と伝兼好筆「名所歌集」 —	新谷秀夫	96
吉田包春作・正倉院模造宝物「子目利箒」「粉地彩絵倚几」(高岡市万葉歴史館蔵)と大伴家持の玉箒の万葉歌について(二) — 注釈史的視点で —	田中夏陽子	107
【展示余滴】 万葉閑話四題	関隆司	123

彙報

高岡市万葉歴史館紀要 第三十三号

# 『万葉集』の部立名としての「相聞」

鄧 慶 真

## 一 問題提起

「相聞」、「雑歌」と「挽歌」は『万葉集』の三大部立である。その中で、「相聞」の歌数が一番多く、三分の一を超える一七〇〇余首と数えられる<sup>一</sup>。この三つの名称のうち、「雑歌」と「挽歌」は、『文選』巻二十八にその分類名が見られるため、直接『文選』に由来し、歌の内容も『文選』に準じていると考えられている<sup>二</sup>。しかし「相聞」だけは、『文選』を含む現存漢籍の中で分類名として使用されていない。ためにこの部立名の由来や、分類基準については、現在も論が一定しないように思われる。

万葉相聞歌の内容については契沖の次の理解が代表的と思われる。

相聞ハ後ノ恋部ニ当レリ<sup>三</sup>。古今集ノ恋部ハヒタスラ  
男女ノ中ニ限レリ。其後ハマレマレハ男女ノ中ナラヌ  
モ見エタリ。今集ハ親族朋友ニモ亘レリ。サレト本ト

スル所ハ男女ノ中ナリ。相聞ト云ヘハ問答ト同シ名ノ  
様ナレト、唱和セル歌ハ相聞ノ中ニモ別ニ出シタレハ、  
是ハ唱和セネト、男ノ女ニ贈リ、女ノ男ニ贈ルヲ相聞  
トハ云ヒテ、又相贈ラネト思ヒヲ述タルヲハ同シク名  
付タルナリ<sup>四</sup>。

契沖は、「相聞」歌に親族と友人関係の歌もあることや、相聞歌には答えの歌が必ずあるわけではないこと、相贈らず片方が思いを述べるだけのものがあることに着目し、相聞歌がもともと男女間の恋歌であり、傍線部のように親族友人間の使用はあくまでも使用範囲の拡大とする。

しかし、「恋歌」という語は『万葉集』中に次のように四例見える。

- 1、門部王恋歌一首（4・五三六歌題詞）
- 2、大宰大監大伴宿祢百代恋歌四首（4・五五九〜五六二歌題詞）
- 3、右三首恋歌（15・三六〇三〜三六〇五歌左注）
- 4、右歌一首、忌部首黒麻呂夢裏作此恋歌贈友。覺而令誦

## 習如前(16・三八四八歌左注)

その中の1と2は、全体が「相聞」歌巻である巻四の中に「題詞」として見えるものであり、万葉集編者は、「恋歌」という言葉の存在を知りながら、それを部立の名にはしなかったということが判る。ここから、「相聞」歌は「恋歌」を含めるが、「恋歌」に限らないことには、契沖のいう使用の拡大ではなく、積極的な理由があるのではないか。

「相聞」という言葉そのものについては、漢籍の例に『文選』に収録された曹植の「與呉季重書」にあることは夙に万葉学者たちに指摘されてきた。「適对嘉賓」、口授不悉、往来教相聞。曹植白。」(『文選』巻四十二「書中」)である。そのほかに、山田孝雄氏は「相聞考」と「相聞考(補改)」の中で『漢書』、『南史』、月儀の「十二月朋友相聞書」、「搜神記」、「世説新語」、「玉台新詠」、「王右軍書記」、「古來能書人名」と『五十六種書』、そして唐の『白氏文集』の中の用例を列挙した。山田氏はそれらの用例から「相聞」は六朝と隋唐の「慣用語」であり、『万葉集』の編者が「相聞」を部立名として採用したのは当時の通用に従ったに過ぎず、上述『文選』の唯一例から由来するものではないとい<sup>五</sup>。現在「相聞」を字音で読むべき山田氏の主張が広く認められている。

筆者は、「相聞」という言葉の由来に関する山田説には概ね賛成であるが、漢籍本来の「相聞」という言葉の意味に

ついて、近世以降の万葉集研究者の理解が奈良時代の日本人の理解と果たして一致するかについてさらに探ることにする。

## 二 漢籍に見る虚詞「相」の意味

### ——山田説を中心に

山田氏は漢籍に用いられた「相聞」の例を検討し、「相聞」という文字の意は、『漢書』「鄭吉伝」の例に拠ると今日の交渉の意に近く、同書「遊俠伝」の例に拠ると今日の報告というに近く、『搜神記」や『玉台新詠』、『文選』の例によると訪問の意に近く、『南史』の例によると信書を通じて訪ねる意であり、王僧虔の『古來能書人名』の例などに拠ると往来消息の意であるとして、「相聞とは概括していへば、往復存問の意なるを見るべし」とする。そして、「その文字の面を以て推すに相は交互の意にして、聞は以聞の聞にして、意志を傳達する義なり」と、「相聞」の二文字をそれぞれ、「相」を「交互の意」とし、「聞」を「意志を傳達する義」として分けて解釈している<sup>六</sup>。

しかし、「交渉」や「往来消息」はそれとして、「相聞」二字で「報告」、「訪問」、「信書を通じて訪ねる」などの意を表すとすれば、それは交互の行為ということではなく、「交互」の意を持つ「相」の字がなぜ必要であるのだろうか。

日本で最古の例とされる『勝鬘經義疏』（以下『義疏』と称す）に見る「相聞」について、山田氏は「信書を以て意中を告げたるをさせるものなり」（「相聞考」「相聞考（補改）」と解釈されており、そこには「交互」の意はなさそうである。そこで『義疏』に見るこの「相聞」例を検証してみる。

波斯匿王と末利夫人が娘の勝鬘夫人に仏法を勧めた経緯を語った元の経文が次のように書かれている。

時波斯匿王及末利夫人信法未久、共相謂言、「勝鬘夫人是我之女、聰慧利根、通敏易悟、若見佛者、必速解法、心得無疑、宜時遣信發其道意上。」夫人白言、「今正是時。」王及夫人與勝鬘書、略讚如來無量功德。即遣內人名旃提羅、使人奉書至阿踰闍國、入其宮內、敬授勝鬘。（略）

（勝鬘師子吼一乘大方廣經）  
傍点部は、王と末利夫人が旃提羅という女官を遣わし、「娘の勝鬘夫人がいる」阿踰闍國に参らせた後、使人が勝鬘夫人が居住する宮に入り、仏法を勧める書信を謹んで勝鬘夫人に授けた、という内容である。当該箇所に対する『義疏』に「相聞」という語が見当たらないが、「外縁序」の「第二」には「從夫人白言以下言畢即作書讚佛功德遣信令聞。」<sup>七</sup>と、「遣信令聞」が見え、そして「聞」は、「從書得解。亦稱為聞」とする。その上、この「外縁序」が含まれる「第二別序」に続く「第三三大願章」の冒頭に、『義疏』

が「勝鬘前來未聞常住」。但今因父母遣書。乃得聞。」と、前掲経文の内容に再度触れた。「相聞」という語の登場は「三徳」についての解釈の後である。

且上父母相聞。既云聖德無量不可備陳。故但略嘆三徳爾也。所以勝鬘亦從但嘆三徳也。（『勝鬘經義疏』）

ここの「父母相聞」は「上（前文）の意」に「あつた」「遣信令聞」と「因父母遣書。乃得聞」のことであり、山田氏の前掲解釈は正しい。つまり、「相聞」がこの文脈では「往復存聞」の意ではなく、「相」には「交互」の意がないのである。

さて、漢語の「相聞」を知る手掛かりに『漢語大詞典』「相聞」を見てみると、そこには、「①彼此都能聽到。極言距離之近。（互いに聞こえる。極力距離の近いことをいう。）」と「②互通信息、互相通報。（互いに音信を伝える。互いに通報する。）」<sup>八</sup>とあり、いずれの「相」も「互いに（又は交互に）」の意とされる。万葉の「相聞」の「相」に対する山田説はこれの②と同じである。しかし、同詞典の「聞」（平声）の項目に挙げられた「相聞」例に見る「相」は、「交互」の意ではない。

（一）巡使雷萬春於城上與潮相聞賊弩射之、面中三六矢而不動。

（『資治通鑑』卷二百十八唐紀三十四）

（張巡が郎將雷萬春に城壁の上で令狐潮に「張巡の」意志を伝達させたところ、賊軍は弩で雷萬春に矢を

放った。顔に矢が六本の中したが、「雷萬春は」動かなかった。

この「相聞」の「聞」は「傳告(伝え告げる)」「漢語大詞典」「聞(平声)④」の意であり、「相」は、「交互に」の意では解釈し難く、意志伝達される対象(ここでは賊軍を率いる令狐潮)を指すと考えるのが文脈的に自然である。つまり、意志伝達という行為は、むしろ一方的である。それゆえ、『漢語大詞典』「相聞」の①と②のほかに、この「相聞」例に示された「相」の用法による意も加えるべきであろう。

動作の対象を指す「相」の用法は、中国の文言文虚詞辞典の類に広く認められ、「相」が動詞の前に位置するこの用法は、副詞的用法と見なされるものが多い。『古代漢語虚詞詞典』は代名詞的副詞の用法を持つ「相」の歴史の様相について次のように述べる。

・念平聲的是含有指代意義的副詞。受「相」修飾的動詞、其動作行為爲總要涉及兩個主体、他們或互爲施受、或一方爲施事、一方爲受事。這兩項用法、在『詩經』中已見用例。到春秋戰國、「相」又用來提示兩個主體的比較關係、以及兩個主體共同實施同一行為等。「相」的上述用法、後世沿用於言文中<sup>九</sup>。

(平声と読むのは代わり指す意を含む副詞である。「相」に修飾される動詞は、その動作行為が常に二つの主体に関わる。それらは、或いは互いに授受関係にあり、

或いは片方が授ける側で、もう片方が受ける側である。この二種の用法は、『詩經』にすでに用例が見える。春秋戦国時代に至り、「相」は又二つの主体の比較関係や、二つの主体が共に同一行為を実施するなどを示すに用いられる。「相」の上述した用法は、後世文言文にて使われ続けた。)

更に、

・表示在雙方的彼此對待關係中、只有一方爲施事、「相」一般兼有指代接受動作一方面的作用。仍可譯做「相」。

(双方の対応関係の中で、片方だけが事を施す。「相」は一般的に動作を受ける側を代わり指す役割を果たす。依然と「相」に訳することができる。)

の意のほか、「相」には片方が施す行為の対象を代わり指す用法もあることが分かる。

「相」のこの代名詞的用法は次の二種の辞書にも副詞的用法として紹介されている。

・在雙方對等關係中、由某一方面發出的動作、行為、涉及於另一方面。相、在這裏兼有指代以接受動作、行為的作用。譯成語體文時、可以根據文句實際意義、補出動作、行為所涉及的對象。(『文言文虚詞大詞典』<sup>十</sup>)

(双方の対等関係の中で、片方より行った動作、行為が相手に及ぼすこと。相は、ここでその動作、行為を受

けることを指し、その代わりになる役割を兼ねる。白話文に訳す時、文脈の意にそって、動作や行為が及ぼす具体的な対象を補って訳出することができる。）

- 表示動作行為が只涉及一方、實際起代詞作用。可譯爲「我」、「你（您）」、「他」、「他們」、「它」等。（『常用文言虛詞詞典』）<sup>十一</sup>（動作行為は片方にしか及ぼさないことを示す。実際には代名詞の役割を果たす。「私」、「あなた（貴方）」、「かれ」、「かれたち」、「それ・あれ」などに訳すことができる。）

『文言虚詞詮釋』はさらにその用法を「代詞（代名詞）」に分類する。

- 表示偏指一方。在雙方的對待關係中、「相」指代接受動作的一方、可以指人、也可以指事物。要根據文義適當譯出。現代漢語的「相」仍保留這樣用法、如「好言相勸」等<sup>十二</sup>。

（片方を指す。双方の対応関係の中で、「相」は動作を受ける側を代わりに指す。人を指すこともできるし、物を指すこともできる。文の意義に拠って適切に訳し出す。現代中国語の中の「相」にはこの用法がまだ保っている。「好言相勸（いい言葉で有める）」などの如し。）品詞分類に少々差が見えるが、「相」の代名詞的用法、つまり片方が施す行為の対象を代わりに指す用法について、右に挙げた各辞書の釈義は一致する。中で挙げられた唐までの

用例をこゝで纏めてみる。

『詩経』——乃如<sub>二</sub>之人<sub>一</sub>兮、逝不<sub>二</sub>相好<sub>一</sub>。胡能<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>定、

寧不<sub>二</sub>我報<sub>一</sub>。（（<sub>レ</sub>抑風・日月））

『孟子』——從<sub>二</sub>徐子之道<sub>一</sub>、相率而為<sub>レ</sub>僞者也、惡能<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>

國家<sub>一</sub>。（（<sub>レ</sub>滕文公上））

『列子』——雜然相許。（（<sub>レ</sub>湯問））

『史記』——苟富貴、無<sub>二</sub>相忘<sub>一</sub>！（（<sub>レ</sub>陳涉世家））

『漢書』——始吾與<sub>レ</sub>公為<sub>二</sub>刎頸之交<sub>一</sub>、今王與<sub>レ</sub>耳且暮死、

而公擁<sub>レ</sub>兵數萬、不肯<sub>二</sub>相救<sub>一</sub>。（（<sub>レ</sub>張耳陳餘傳））

——又念<sub>二</sub>十金法重<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>忍<sub>二</sub>相暴章<sub>一</sub>、故密以<sub>二</sub>

手書<sub>二</sub>相曉<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>君自圖<sub>一</sub>進退。（（<sub>レ</sub>薛宣傳））

『後漢書』——穆居<sub>レ</sub>家數年、在<sub>レ</sub>朝諸公多有<sub>二</sub>相薦者<sub>一</sub>。（（<sub>レ</sub>朱穆傳））

『論衡』——使此言意結、文又不<sub>レ</sub>解、是孔子相<sub>レ</sub>示未<sub>二</sub>形

悉<sub>一</sub>也。（（<sub>レ</sub>問孔））

『樂府詩集』（卷七十三）——吾今且報<sub>レ</sub>府、不<sub>レ</sub>久當<sub>二</sub>歸還<sub>一</sub>、

還必相<sub>レ</sub>迎取。（（<sub>レ</sub>焦仲卿妻詩））

『樂府詩集』（卷二十五）——爺娘聞<sub>二</sub>女來<sub>一</sub>、出<sub>レ</sub>郭相<sub>レ</sub>扶將。

（（<sub>レ</sub>木蘭辭））

『三国志』——子敬！孤持<sub>レ</sub>鞍下<sub>レ</sub>馬相<sub>レ</sub>迎、足<sub>二</sub>以顯<sub>レ</sub>卿未。

（（<sub>レ</sub>吳書・魯肅傳））

『世說新語』——先公勛業如<sub>レ</sub>是、君作<sub>二</sub>「東征賦」<sub>一</sub>、云<sub>二</sub>

何相<sub>レ</sub>忽略<sub>一</sub>。（（<sub>レ</sub>文學））

——足<sub>二</sub>下言<sub>一</sub>何謬也、故不<sub>二</sub>相答<sub>一</sub>。（（<sub>レ</sub>言語））

『全唐詩』—兒童相見不<sub>二</sub>相識<sub>一</sub>、笑問客從<sub>二</sub>何處<sub>一</sub>來。

(賀知章・回<sub>レ</sub>鄉偶書詩)

『三戒』—蔽<sub>レ</sub>林間<sub>一</sub>窺<sub>レ</sub>之、稍出近<sub>レ</sub>之、慙慙然莫<sub>二</sub>相知<sub>一</sub>。

(柳宗元・黔之驢)

右例文の出典から、「相」の代名詞的用法は古くからの用法であることが分かる。諸辞書の用例の中で「相+聞」の組み合わせが見当たらないが、次の二例は、上掲(一)『資治通鑑』の「相聞」例同様、「相」が代名詞的用法であると考えられる。

(二) 初、劉毅家在<sub>二</sub>京口<sub>一</sub>、酷貧、嘗與<sub>二</sub>鄉曲士大夫<sub>一</sub>往<sub>レ</sub>東<sub>一</sub>堂共射、時悅為<sub>二</sub>司徒右長史<sub>一</sub>、要<sub>二</sub>府州僚佐<sub>一</sub>出<sub>レ</sub>東<sub>一</sub>堂、毅已先至、遣與<sub>レ</sub>悅相聞曰、「身並貧躋、營<sub>二</sub>一遊<sub>一</sub>甚難。君如意人、無處<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>適<sub>一</sub>、豈不<sub>レ</sub>能<sub>四</sub>以<sub>二</sub>此堂<sub>一</sub>見<sub>三</sub>讓<sub>一</sub>。」悅素豪、徑前不<sub>レ</sub>答。毅語<sub>二</sub>眾<sub>一</sub>人並避、唯毅留射如<sub>レ</sub>故。悅廚饌甚盛、不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>毅、毅既不<sub>レ</sub>去、悅甚不<sub>レ</sub>歡。毅又相聞曰、「身今年未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>子<sub>一</sub>鵝<sub>一</sub>、豈能<sub>四</sub>以<sub>二</sub>殘炙<sub>一</sub>見<sub>三</sub>惠<sub>一</sub>。」悅又不<sub>レ</sub>答。(略)

『南史』卷三十五列傳第二十五劉湛庾悅族弟登之酷貧、たつた劉毅がある日仲間を呼び寄せ、東堂で弓を射る遊びに出かけた。当時すでに司徒右長史である庾悦も役人たちと同じところへ遊びに出掛けた。劉毅が先に着いたので、人を遣わして庾悦に声をかけ、自分たちに東堂を譲ってもらえないかと求めた。それに対し、庾悦はひたすら前に進み、

劉毅を相手にしなかった。仲間を帰らせて劉毅が自分一人残り、前のように弓を射る遊びを続けた。それから庾悦が仲間にも美食を振る舞う時冷遇されたため、劉毅は庾悦に食べものことで文句を言い聞かせた。が、庾悦は又それに答えなかった。という粗筋であるが、傍線部からわかるように、片方が自発的に声をかけるものの、相手からの返事が無い「相聞」の例である。

(三) 幽明録曰、「索<sub>二</sub>元<sub>一</sub>在<sub>二</sub>歷陽<sub>一</sub>、疾病、西界一年少女子姓<sub>レ</sub>某、自言<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>神所<sub>レ</sub>降<sub>一</sub>、來與<sub>レ</sub>元相聞<sub>上</sub>、許<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>治護<sub>一</sub>。元性剛直、以為<sub>二</sub>妖惑<sub>一</sub>、收以付<sub>レ</sub>獄、戮<sub>三</sub>之於<sub>二</sub>市中<sub>一</sub>。女臨<sub>レ</sub>死曰、『卻後十七日、當<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>索元知<sub>二</sub>其罪<sub>一</sub>。』如<sub>レ</sub>期、元果亡。(『世說新語』傷逝第十七)

(索元は歷陽で病を患った。西界からある年若い女子が自ら自分の身に神が降りたため、「神の意志を伝えに」ここに来て索元を訪れたといひ、索元の病の治療と看護を約束した。索元は性格が剛直で、人を魅惑する怪しげものだと思ひ、女子を牢獄に収め、そして市中で殺した。女子が死ぬ前に、「これから十七日後、索元にその罪を知らせるべし」と言ひ残した。言われた通りに、索元はその日に亡くなった。)

(三) は(二)同様、「相聞」が一方的に働きかける場合に使われている。(三)に見る「與<sub>二</sub>○○<sub>一</sub>相聞」という文型が、まったく知らない人が何かを伝えにやって来る場合にも用

いられており、「○○」は「與相」の文型を以って消息を受け取る相手を指す。そのような文型は早く後漢末の応劭の著作『風俗通義』にもみる。

黨學<sup>三</sup>「春秋」長安<sup>一</sup>、聞<sup>二</sup>報讎之義<sup>一</sup>、輟<sup>レ</sup>講下辭歸  
報<sup>レ</sup>讎。到與<sup>二</sup>卿佐<sup>一</sup>相聞、期<sup>二</sup>鬪日<sup>一</sup>……

その文型の変形に、「相聞與「与」○○曰」などがある。  
(過譽・太原周黨)

汰既疾勢未<sup>レ</sup>歇不堪<sup>レ</sup>久坐<sup>一</sup>、乃乘<sup>レ</sup>輿歷<sup>レ</sup>廂迴出。相聞  
與<sup>レ</sup>溫曰、風痰忽發不堪<sup>レ</sup>久坐<sup>一</sup>、比當更造。

(『高僧傳』卷第五義解二竺法汰)

そして、前掲(一)と(二)に見る「使遣(誰か)與「与」○○相聞(曰)」のほか、次のように「令」で伝達者を示す例もある。

王便令<sup>レ</sup>人與<sup>二</sup>相聞<sup>一</sup>、云、「聞<sup>二</sup>君善吹笛<sup>一</sup>、試為<sup>レ</sup>我一奏。」

(『世説新語』任誕第二十二)

右に挙げた例の中の「相聞」は一方的に意志を伝達する意を表し、「使」や「遣」や「令」で示される配達者が間に介在することが多い。そして伝達された内容は殊に恋情に限らず、なんでも構わないのであるが、頼み事がある場合が多くみられる。そのような行為は、『文言文虚詞大詞典』がいう双方の「対等関係」より、むしろ『古代漢語虚詞詞典』と『文言虚詞詮釋』がいう双方の「対応関係」の中での行為である。

ここで注意を要するのは、伊藤博氏が挙げる『南史』「蔡廓傳」の例である。

(四)樽字景節、少方雅退默、與<sup>二</sup>第四兄寅<sup>一</sup>俱知名。(中略)  
性甚凝厲、善<sup>二</sup>自居適<sup>一</sup>。女為<sup>二</sup>昭明太子妃<sup>一</sup>、自<sup>二</sup>詹事<sup>一</sup>  
以下咸來造謁、往往稱<sup>レ</sup>疾相聞、間遣<sup>レ</sup>之。及<sup>二</sup>其引進<sup>一</sup>、  
但暄寒而已、此外無<sup>レ</sup>復<sup>二</sup>餘言<sup>一</sup>。

(『南史』卷二十九列傳第十九「蔡廓(略)」)

(蔡樽は字が景節である。小さい時行儀正しく、慎み深かった。四番目の兄蔡寅と共に名が知られる。(中略)蔡樽は生まれつきの性格が甚だおごそかである。自分の生活を心地よく整えることが上手である。娘は昭明太子妃であるため、詹事以下の官僚はみんな敬意を払いに彼を訪れる。蔡樽はよく自分が病氣だと、「来訪者を通じて」皇帝(或いは娘)に伝える。「皇帝は」時々「太子妃を」見舞いに帰らせる。娘を家に迎え入れ、親子は世間話をするだけで、ほかに話すことがない。)

ここの「相聞」は、蔡樽が病気を口実に娘を帰省させてほしい気持ちを来訪者を通じて、皇帝や娘に伝える行為を表す言葉である。「梁昭明太子と樽との個人間の親密を匂はせた極めて微妙なニュアンスを持つ」<sup>十三</sup>という伊藤氏の解釈は、「相」を「交互に」とみたことによる誤解とせざるをえない。上掲使用例を含め、『太平広記』に収録された六朝から唐にかけての小説類と口語体の文にも代名詞的用法を持つ



「相」と動詞「聞」の組み合わせが多くみられる。内容からみて、そのような「相聞」が男女間より、むしろ友人親族間、時には見知らぬ間柄で使用される場合が多い。『勝鬘經義疏』にある「相聞」もこの用法の一例とみてよい。

ここまでみてきたように、「相+動詞」の構造で、虚詞「相」は「交互」に何かをする場合と一方的な自発的行為をする場合がある。それゆえ「相聞」についても二通りの解釈が考えられるのである。以下、前者の意を持つ「相」、ないしその意を用いる「相聞」の用法を「用法一」とし、後者のそれを「用法二」とする。

### 三 「相聞」の意味と万葉部立名としての由来——小島説を中心に

万葉「相聞」の意義と由来を中国文学に求める学説の中で、山田説と同じく「相聞」の用法二に触れていない点は、小島憲之氏も同様である。加えて氏は「相聞」が持つ意義について、「聞く」の方ではなく、「問ふ」の方に意味の重点がある<sup>十四</sup>とし、「問」と「聞」とが同義である<sup>十五</sup>として『太平広記』から「相聞」と「相問」の両方が使われている例を挙げる。

(五) 廟有<sup>三</sup>數婦人像<sup>一</sup>、甚端正。某等醉、各指<sup>レ</sup>像以戲<sup>二</sup>相配匹<sup>一</sup>。即以其夕、三人同夢、蔣侯遣<sup>三</sup>傳教<sup>一</sup>相問曰、「家

子女並醜陋、而猥垂<sup>三</sup>榮顧<sup>一</sup>、輒尅<sup>三</sup>某日<sup>一</sup>、悉相奉迎<sup>二</sup>。」某等以<sup>三</sup>其夢指適異常<sup>一</sup>、試往<sup>三</sup>相問<sup>一</sup>、而果各得<sup>三</sup>此夢<sup>一</sup>、符協如<sup>レ</sup>一。 (『太平廣記』卷二九三神三蔣子文)

(『太常卿、會稽内史と光禄大夫の子息たち三人が蔣山廟に遊びに行った。』廟の中に容姿端正な婦人像がいくつあつて、酔っぱらつた三人はそれぞれ像を指して妻だと戯れた。夕方になつて、三人とも同じ夢を見た。「夢の中で廟の神である」蔣侯が命令を伝える役人を遣わし、彼たちにこう伝えた。「うちの子女はみんなぶさいくですが、お気に入つていただき、光栄でございます。則ち某日に、あなたたちをお迎えいたしましょう(『死の世界に迎えましょう』の意)」と。三人はその夢がとも異常であると思ひ、試みに「仲間のうちへ」行つて互いに尋ねたところが分かつた。)

右の「相聞」は「蔣侯が使いを遣わして三人に伝えた」意であるのに対し、「相問」は「三人が互いに問いあう」意で、両者の意が違ふのである。ちなみに、原文傍点部の「相奉迎」の「相」も「奉迎」する対象の三人の男を指し、「交互」の意ではないことが明白である。

ところがこれとは別に、小島氏が挙げた例の中で確かに「相聞」と「相問」とが混用されるものがある。ここで漢字「聞」と「問」との意味上の関連について掘り下げる。

同じく徐鉉本(宋)に基づくものというが、『説文解字』の「聞」に異なる解釈が見られる。『説文解字注』には「聞」は「知<sub>レ</sub>聲也」とあり、段玉裁が「往日聽。來日聞。大學曰。心不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>焉。聽而不<sub>レ</sub>聞。引<sub>一</sub>申<sub>レ</sub>之為<sub>二</sub>令聞廣譽<sub>一</sub>。」と注を付けた<sup>十六</sup>。一方、中華書局版の『説文解字』には、「聞」は「知聞也」である<sup>十七</sup>。

「知聞」について、『漢語大詞典』に「②通知(一する)、告知(一する)」、「③消息」、「④交結(友達を作る)、交往(付き合う)」の意があると、前掲山田説にも見るものである。そして「相」と組む「知聞」の用例は沈約(梁)撰『宋書』に見られる。

(一〇)初休範自<sub>二</sub>新林<sub>一</sub>分遣<sub>二</sub>同党杜耳<sub>一</sub>、丁文豪、杜墨蠡等<sub>一</sub>、直向<sub>二</sub>朱雀門<sub>一</sub>。休範死、墨蠡等不<sub>二</sub>相知聞<sub>一</sub>。

〔『宋書』列傳第三十九文五王桂陽王休範〕  
 (初めに、休範は新林で同党の杜耳、丁文豪、杜墨蠡などを手分けに朱雀門にまっすぐ向かわせた。休範が死に、墨蠡などは(それを)知らされなかった。)

この「相」は明らかに「交互」の意ではなく、用法二「知聞」②の意との結合と考えられる。それは同じ事件を記録した李延壽(唐)撰『南史』(卷十四列傳第四宋宗室及諸王下宋文帝諸子桂陽王休範)によって裏付けられる。李延壽は「休範雖<sub>レ</sub>死、墨蠡等不<sub>レ</sub>知。」と述べ、そこには「交互」の意がない。

それに対し、「問」は、

問 訊也。从<sub>レ</sub>口門<sub>レ</sub>聲。亡運切。(『説文解字』)

である。『漢語大詞典』「問」⑯によれば、「聲譽(名声、名譽)の意として「問」に通じる。それから、同詞典去声「問」②に、「慰問(挨拶を伝える)」と「詢問(問い合わせる、尋ねる)」の意が「問」に通じるとも見える。ここで『説文解字』と『漢語大詞典』にみる二字の意味上の関連を整理し、表一とする。

問 (去声)	問 <sub>去</sub>	聞 <sub>平</sub>
	通じ合う意	二字が
◇告(告げる)、告訴(知らせる) 〔『漢語大詞典』「問」⑬〕	◇知 <sub>レ</sub> 聲也、聲譽(名声、名譽) 〔『説文解字』「問」・『漢語大詞典』「問」⑯「聞」去声①〕	◇問(通知する、告知する)〔『説文解字』「聞」〕 ◆傳布(伝え広める)、傳揚(広く伝える)、傳告(伝え告げる) 〔『漢語大詞典』「聞」平声④・山田氏がいう「意志を傳達する」〕 ◆使君主聽見、謂向君主報告。亦汎指向上級或官府報告(君主に聞かせる、報告する。また一般的に目上や役所に報告することを指す)。 〔『漢語大詞典』「聞」平声⑤・山田氏がいう「以聞」〕

〔表一〕「問」と「聞」との意味的相関

表一から二字に類義の多いことがわかる。しかし、平声「問」にある「伝える」意は「問」に見えない上、君主など目上の人に報告する意も「問」にはない。この二点は相聞歌に伝達の作歌事情を持つ歌、そして天皇や目上の人と関わる歌が収録されていることと符合する。万葉部立名の「相聞」が「相問」に取り替えられるものではないとみてよい。

また、万葉「相聞」の由来について、小島氏はさらに「相聞」と「書」との関係を探る。

相聞の語は諸書に例が多いが、萬葉人には法帖尺牘類によつて熟知のことばであり、同時に「相聞（相聞書）」は書翰に用ゐる文體もさす。（中略）「相聞」の登場する源泉には、やはり文選の私的贈答を含む「書」の部分（相聞の例一つあり）と共に、法帖尺牘類（所謂書法にみえる「相聞《書》」）を忘れてはならない（法書要録卷四引用、唐張懷瓘の書儀に「近者虞世南亦工此法一、或君長告令、公務殷繁、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>機、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>速、或四海尺牘、千里相聞」ともある）。十八

右の文から二つのキーワードが読み取られる。一つは文体名としての「相聞（相聞書）」もう一つは字体名としての「相聞《書》」である。前者について、氏は「この「相聞」は少なくとも盛唐頃に於いては文體として認識されてゐる」といい、根拠として挙げたのは『文鏡秘府論（南卷）』「論文意」に見る王昌齡（唐）の『詩格』の用例である。ところが、

その「相聞」が文体名であるか否かは、句点の打ち方によつて変わってくる。

（七）夫作<sub>レ</sub>詩用<sub>レ</sub>字之法、各有<sub>二</sub>數般<sub>一</sub>。一敵體用字、二同體用字、三釋訓用字、四直用字。但解<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>詩、一切文章、皆如<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>。若<sub>レ</sub>相聞<sub>レ</sub>書題、（中略）判<sub>二</sub>一同<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>。十九

本来句点などない文章に、のちに句点を入れて断句する場合、入れる箇所が違えば意味も違ってくるのは中国語の文法の特徴である。右のように「相聞」と「書題」の間に点を入れれば、小島氏がいうように、「相聞」も「書題」もうしろに続くほかの文体名同様、文体の名として理解されるべきである。しかし、注釈書の中で「相聞」と「書題」の間にそれが打たれていないものもある。王利器氏の『文鏡秘府論校注』<sup>二十</sup>、興膳宏氏が訳注した『文鏡秘府論校考』<sup>二十一</sup>はそうである。興膳氏は同所を「相聞の書題」<sup>二十二</sup>と訳し、つまり、二語の間に句点が打たれていない「相聞書題」の「相聞」は「書題（書簡）の意」<sup>二十三</sup>）を修飾限定する語であると理解される。そのため、王昌齡の『詩格』にみる用例は「相聞」が文体名である確証にはならなくなる。

そして、「行書・草書」体の別名である「相聞《書》」について、小島氏は王僧虔『名書録』の「行書」<sup>三</sup>、曰<sub>二</sub>狎書<sub>一</sub>、相聞者也。（中略）更為<sub>二</sub>草藁<sub>一</sub>、藁是相聞書也」を引き、「即ち『書翰』に用ゐる書體である」とし、万葉人は「必ずしも文

獻によらないでも、王羲之の法帖などによって書法を学ぶにつけて、『相聞(書)』の概念を得てゐたものと推定してよい<sup>二十四</sup>という。小島氏はさらに前掲書道に関する文献集『法書要録』巻四に見る引用の「相聞」例を括弧で囲んで、「相聞」の登場する源泉には、「法帖尺牘類(所謂書法にみえる「相聞《書》)」を忘れてはならない」と説いた。書法の字体名である「相聞《書》」の原義を無視して書信を書くときによく使われる字体であるだけで万葉「相聞」の源泉の一つであるということは、推測の域を出ていない。それに対しての議論を控えるが、前文の引用で触れた「相聞《書》」と関連付けられた張懷瓘(唐)の『書議』の例を考察しておく。

(八) 宋、齊之間、此體「行書體」彌尚、謝靈運尤為<sup>二</sup>秀<sup>一</sup>傑<sup>一</sup>。近者虞世南亦工<sup>三</sup>此法<sup>一</sup>。或君長告令、公務殷<sup>一</sup>繁、可<sup>二</sup>以應<sup>レ</sup>機、可<sup>二</sup>以赴<sup>レ</sup>速。或四海尺牘、千里相聞、跡乃含<sup>レ</sup>情、言惟敘<sup>レ</sup>事、披<sup>レ</sup>封不<sup>レ</sup>覺、欣然獨笑。雖<sup>二</sup>則不<sup>レ</sup>面、其若<sup>レ</sup>面焉。

(張彥遠『法書要録』<sup>三十五</sup> 卷四所収張懷瓘『書議』) 前掲括弧に囲まれた小島氏の引用は「近者虞世南亦工<sup>三</sup>此法<sup>一</sup>……千里相聞」の部分で、「尺牘」と「相聞」にそれぞれ「△」と「○」のルビが付けられている。しかし、二つの言葉についてどう理解すべきかの説明がなされていない。右にあるようにその段落全体の内容を視野に入れれば、行書体がますます流行り出した南朝宋と齊の頃、謝靈運と虞世南が

その書体がとても堪能であったことに加え、行書体が歓迎された理由が紹介されたものと分かる。つまり、君主や長官の告げ事や命令、ないし繁多な公務などを機敏に処置できる場合と同じく、「時には天下各所の書信が、千里も送り伝える。書跡には感情が含まれるのに対し」、言葉はただ事を述べ記すだけである。封を開いて思わず一人で微笑み、「相手の」顔が見えなくても、見たようである。」と、対になつている部分は平行文「或……、或……」の文型で表現された「公」と「私」の場合である。前のほうに位置する「或君長告令、公務殷繁」の「告令(名詞)」と「殷繁(形容詞)」を参照して分かるように、後ろに続く「或四海尺牘、千里相聞」の「尺牘(名詞)」と「相聞(動詞)」も品詞が対応せず、散文である。つまり、この例の中の「相聞」は動詞としての本義が使われていて、法帖尺牘類によく見る語なら、このような「相聞」の本義も万葉人がよく知っていたはずである。ちなみに、行書(相聞《書》)体が書信にだけでなく、公文書にも使われていたことは『法書要録』の右の内容から窺える。

小島氏が案じるように、「文選」の「書」の部は「相聞」が登場する源泉の一つである可能性もあろうが、動詞としての本義を持つ「相聞」が名詞化し、「往来消息の文書」の意に転じる用法は山田説に見た通りである。漢籍『南史』にもそのような例がある。

「張敷」善持<sub>二</sub>音儀<sub>一</sub>、盡<sub>二</sub>詳緩之致<sub>一</sub>。與<sub>レ</sub>人別、執<sub>レ</sub>手曰、「念<sub>二</sub>相聞<sub>一</sub>。」餘響久之不<sub>レ</sub>絶。

〔南史〕卷三十二列傳第二十二張邵子敷（略）

〔張敷は〕言葉のリズムをコントロールすることが上手であり、優しい意を表現し尽くす。人と別れるとき、手を執つて、「お便りを待ち望んでおる」という。「その」余韻は時間が経つても絶えない。

この文は『藝文類聚』（卷二十九人部十三別上）にも収録されており、「相聞」が名詞としての用法は当時大和の知識層でよく知られていたと考えられる。そういう意味で、小島氏が万葉部立名としての「相聞」の由来を名詞としての「相聞」の意味と関連付けるのも無理がない。しかし、有力な出典が見出せない限り、やはり「相聞」が漢語における本義に部立名由来の根拠を求めるべきであろう。

## 結び

贈答や問答以外に、冒頭で紹介した契沖の万葉相聞歌像の中で、呼びかけの歌に答えるの歌が必ずしもあるわけではないことや、片方が思いを述べるだけの作歌事情があることは、二で検討した漢語「相聞」の用法二に適応される。それに、夫婦や恋人同士のほかに、親族と友人関係、そして天皇との遣り取り、量の差こそあれ、これらの歌が相聞の部立に

収録されている。それは、漢籍では特に恋情に限定されず、いずれの対応関係においても、「相聞」する内容は自由である用法に合致する。

山田氏が指摘した「報告」、「訪問」、「信書を通じて訪ねる」の意の「相聞」の例、そして『義疏』の「相聞」例においては、「相」を「交互に」の意として解釈できない。しかし、そのような場合の「相」は意味を持たない漢字でもなく、「相」と組む動詞が指向性が強いゆえ、意味を完結させるために、その行為が及ぼす対象が必要である。そこで「相」の代名詞的用法はその役割を果たすのである。つまり、「相」は「交互に」の意味と代名詞的用法を兼ね持つことで、右に触れた「相聞」歌の様々な様相が纏められたと考えられる。

万葉部立名としての「相聞」の意義と由来を探求するには、旧来の説が主張された「相」の「交互に」の意のほかに、動作が及ぼす対象を代わり指す「相」の代名詞的用法も大きな意義を持つと考えられる。

## 注

- 一 佐佐木幸綱「相聞」『萬葉集講座』第四卷、久松潜一監修、有精堂出版、昭和四十八年十二月、第二五六頁。

- 二 小島憲之氏は『萬葉集』の雑歌は、『文選』の「雑歌」よりも、むしろ「雑詩」から由来すると主張

- する。『上代日本文学与中国文学』中、塙書房、昭和三十九年三月、第七八八―七九〇頁。
- 三 特に断らない場合、本論文の傍線と傍点、そして文中の日本語訳と漢文に附した返り点は筆者による。
- 四 契沖『萬葉代匠記』（精撰本）「雑説」『契沖全集』第一巻、佐佐木幸綱編、朝日新聞社、大正十五年一月、第二〇七頁。
- 五 山田孝雄「相聞考」、「相聞考（補改）」『萬葉集考叢』、寶文館、昭和三十年五月、第一〇九、第一一一、一一二と一一二―一二二頁。
- 六 山田孝雄「相聞考」『萬葉集考叢』第一一二頁。同「相聞考（補改）」『萬葉集考叢』第一二二頁。同「相聞考（補改）」『勝鬘經義疏』「聖德太子三経御疏」高楠順次郎ほか編、金尾文淵堂、昭和十八年七月、第二頁。この義疏からの引用文に附する返り点と句点はこの本による。以下同。
- 七 「漢語大詞典」、漢語大詞典編纂処編、上海辞書出版社、二〇一一年八月。
- 八 『古代漢語虚詞詞典』、中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編、商務印書館、一九九九年二月。
- 九 高樹藩編『文言文虚詞大詞典』、湖北教育出版社、一九九一年三月。
- 十 『常用文言虚詞詞典』、陝西師範大学『古漢語虚詞用法詞典』編写組編、一九八三年三月
- 十一 李靖之等著『文言虚詞詮釋』、中国労働出版社、一九九四年十一月。
- 十二 伊藤博「相聞の意義」『萬葉』第五号、昭和二十七年十月、第一〇頁。同『萬葉集相聞の世界』、塙書房、昭和三十四年十一月、第二二三頁。
- 十三 小島憲之『上代日本文学与中国文学』中、第七八一頁。
- 十四 同注十四、第七七四頁。
- 十五 許慎著、段玉裁注『說文解字注』、上海古籍出版社、一九八一年十月。
- 十六 許慎『說文解字』、中華書局、一九七二年。
- 十七 小島憲之『上代日本文学与中国文学』中、第七八五頁。返り点は小島氏による。
- 十八 小西甚一『文鏡秘府論考攻文編』、大日本雄辯會講談社、昭和二十八年八月、第一七一頁。小島憲之『上代日本文学与中国文学』中、第七八三頁。返り点は小島氏による。
- 十九 遍照金剛撰、王利器校注『文鏡秘府論校注』、中国社会科学出版社、一九八三年七月、第三〇八頁。
- 二十 遍照金剛撰、盧盛江校考『文鏡秘府論彙校考』、中華書局、二〇〇六年四月、第一三八〇と

一三八三頁。

二十二 興膳宏「文鏡秘府論詠注」『弘法大師空海全集』第五卷、弘法大師空海全集編輯委員会編、筑摩書房、一九八六年九月、第四三三頁。

二十三 同注二十二、第四三五頁。

二十四 小島憲之『上代日本文学与中国文学』中、第七八三頁。

二十五 張彦遠著『法書要録』（中国美術論著叢刊）、人民美術出版社、一九八四年十二月、第一五六頁。

（マカオ大学人文学院日本研究センターインストラクター）

高岡市万葉歴史館紀要 第三十三号

令和五年(二〇二三)三月二十五日 印刷

令和五年(二〇二三)三月三十一日 発行

編集者 高岡市万葉歴史館

館長 坂本信幸

印刷所 高岡市佐野一三八六一

株式会社 トーザワ

電話(〇七六六) 二四―二五〇―番

発行所 933-0016 高岡市伏木一宮一―一―一

(公財)高岡市民文化振興事業団

高岡市万葉歴史館

電話(〇七六六) 四四―五五二―番